シャッター街を
ほのかに明るく照らす
珠玉の47分！

かつての町は今でも温かく、いつまでも優しい。

弱冠23歳の新鋭、青柳拓のデビュー作。

故郷への郷愁と愛しさを奏でる"ほっこり"ドキュメンタリー。
2017年産・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル・コンペティション部門入賞。
4月に開催された地元上映会では1000名以上の観客を動員、圧倒的な支持を集め、ついに全国劇場公開が実現。

監督の故郷、山梨県甲府盆地の南・市川大門。その町並みをヘルメット姿の少年のような風変わりなおじさんがぴょこたんと歩く。
彼は町の人々の手伝いをして、"ひいくん"と愛称され温かく受け入れられている。
いつも、当たり前のように町があり、人がいた。

ひいくんのお母さん

姪のめあちゃん

「地元で映画、撮りたいなあ」

なんとなく考えながら町を歩いていました。
大学でドキュメンタリー映画を制作するため、企画を考えていた時、僕は地元・市川大門にいました。明確な理由はなく、ただカメラを持って誰もいない商店街を歩いていました。

すると、いつものように「ひいくん」が歩いていました。
幼い頃からなんとなく気になっていた人、友達と話してもみんな彼を知っています。
「町長さんよりも有名人」と言われるほどの彼でしたが、彼が普段何をしている人なのか知っている人はほとんどいなかったのです。
誰もいない商店街を、楽しそうに歩いている彼を見て疑問に思いました。
「なんでこの人はいつも楽しそうに、歩き続けているのだろう!?」
その理由が気になって気になって、仕方がありませんでした。

ひいくんを追いかけて、町の今と昔を見つめ、彼の歩いた先々で出会う「人」との交流の中には、教科書には載っていない故郷のもう一つの歴史がありました。
それは映画でしか表現できなかったものだと思うのです。

青柳 拓（監督）

すばらしい「ひいくん」

昔、どんな町にも「ひいくん」のような人がいた。「まれびと」または商店街の「守護神」として愛された。「ひいくんのあるく町」は、うつろうものとかわらぬもの、その両方を淡々と、かつ克明に映し出す。それは町の歴史を、愛着こめて過不足なくえがくことにつながった。こんなふうに撮られたら市川大門の町も満足だろう。青柳拓とそのチームはよい仕事をした。

関川夏央
（作家）

これは滅多にない楽しいドキュメンタリーです。

わがふるさとの町の人気者である"ひいくん"のおかげで、どこにでもありそうな町がどんなになつかしく生き生きした情味に輝いているか。いや、この町の気風こそ、この上なく善良な"ひいくん"にとってかけがえのない貴重なものであることか。これはふるさとによせる讃歌です。ドキュメンタリーはこういうこともできるのです。

佐藤忠男
（映画評論家）

監督＝青柳 拓　プロデューサー・録音＝植田朱里　副プロデューサー＝熊澤海透　撮影＝山野日光政　録音＝福田 陽　編集＝朝野朱沙稀　題字＝渡井秀彦（ひいくん）
アドバイザー＝安岡卓治、島田隆一、山内大堂、辻井 潔　宣伝＝緒谷隆広　配給＝水口屋フィルム　2017年／日本／DCP／カラー／47分　http://hikun.mizukuchiya.net/

↓「みないろ会」とは？

「みないろ会」とは？…「みないろ会」は2018年4月1日に発足。正式名称は「みんなでいろんな映画を見たいからバリアフリー映画を作る会」。メンバーは約40人で代表は森きみ子（佐賀県視覚障がい者団体連合会会長）。バリアフリー映画とは、視覚障がい者が映画をより楽しめるように音声ガイド（副音声）を付けたり、聴覚障がい者が分かりやすいようにバリアフリー字幕を付けて上映する映画のこと。「みないろ会」は、バリアフリー映画の制作と上映を行い、佐賀県内で持続的にバリアフリー映画が楽しめる環境づくりを目指しています。障がいのある人もない人も、映画を通して交流し、つながることができる場づくりに取り組んでいます。2018年8月にバリアフリー映画「もうろうを生きる」を西原孝至監督を招いて上映。その後、募金活動で寄せられた資金などをもとに、短編映画「ひいくんのあるく町」に音声ガイドをつけ、今回の上映会に至りました。これからも長編映画に音声ガイドと字幕をつけて上映するなど、息の長い取り組みをしていきたいと思っています。■事務局：シアター・シエマ 佐賀市松原2-14-16　セントラルプラザ3FTel. / Fax.0952-27-5116 / メール：office@ciema.info